

## 保育における子どもの安全・危険に関する研究動向

田村 佳世

### 1. 研究目的

本論は、保育における子どもの安全や危険に関する研究の動向を整理し、研究及び実践上の課題を明らかにするものである。

具体的には、まず保育での安全管理及び危機管理に関する研究動向を概観し、これまでに用いられてきた保育における安全や危険に関する用語を整理し、今後の研究で用いる用語の定義をする。

次に、近年の保育事故や事故に対する保育者の責任の傾向と、保育における安全管理及び危機管理に関する研究を整理し、子どもの安全や危険に関する問題の所在を明らかにし、研究を進める意義を示す。

続いて、保育における安全管理及び危機管理に求められる保育者の専門性とは何かを考える前提として、保育の質、特に保育者の専門性に関する研究動向を概観し、安全管理及び危機管理における保育者の専門性を検討するための基礎資料を得る。

そして最後に、保育における子どもの安全や危険に関する研究の今後の展望をまとめる。

### 2. 保育における安全管理及び危機管理に関する研究動向

#### (1) 保育における安全管理及び危機管理の位置づけ

保育における安全管理及び危機管理に関しては、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、教育・保育要領）、幼稚園教育要領（以下、教育要領）、保育所保育指針（以下、保育指針）によって設備基準、安全管理、安全対策、保育者の配慮すべき事項、子どもへの安全教育において記されている。また、厚生労働省「福祉サービスにおける危機管理（リスクマネジメント）に関する取り組み指針<sup>1)</sup>」では、福祉サービスにおける危機管理の基本的な視点として「より質の高いサービスを提供することによって多くの事故が未然に回避できる」という考え方（quality improvement；QI）が明示されている。つまり、保育における安全管理及び危機管理のあり方は、保育の質を高めて子どもを危険から守り、保育の目的を達成すべきという考えにある。

また、社会的動向として保育や教育管理下での安全管理及び危機管理への関心は、附属池田小事件<sup>注1)</sup>や東日本大震災を機にしている。

附属池田小事件では、学校内の防犯対策に多くの課題と反省を与えた。例えば、校門での来訪者の管理、職員の安全管理意識の向上、不審者対応、救命処置、子どもの心のケアなどが課題として取り組まれている<sup>2)</sup>。

東日本大震災後の特に福祉サービスにおいては、設備管理、緊急時の備え、避難訓練などの事前の安全管理だけでなく、災害が起こってもサービスを継続するための事業継続計画（business continuity plan；BCP）が重視されるようになった。また、災害時の学校などの役割としては、管理職がいない状況などでも職員の状況に応じた自律的な判断や、学校は情報の拠点になり得ることなどが注目された。さらに地域及び保護者との連携に関しては、帰宅困難や事後の迅速な安否確認を配慮

した下校、引き渡し方法などの問題が指摘されている<sup>3)</sup>。

(2) 保育における安全管理及び危機管理に関連する観点の整理

保育における安全管理及び危機管理を扱った主だった研究を俯瞰すると、安全管理、危機管理、リスクマネジメントなどの用語が様々に表記、定義されており結果的に内容が重複する部分も多い。そこで、保育における安全管理及び危機管理に関する研究に用いられている用語の概念を整理し、本研究における用語の概念を定義する（表1）。

表1 保育における安全管理及び危機管理に関する用語と定義

用語	先行研究の定義	本研究の定義
安全	・危害または損傷・損害を受ける恐れのないこと。危険がなく安心な様。⇔危険（大辞林 第三版） ・ゼロ・リスク <sup>5)</sup>	危険は少なく、安心な状態
危険	・あぶないこと。身体や生命に危害または損失の生ずる恐れがあること。また、そのさま。⇔安全（大辞林 第三版）	怪我などをしやすく危ない状態
危機	・危険な時期。極めて危ない状態。（大辞林 第三版） ・災害などによる緊急の事態 <sup>4)</sup> 。	事故や災害が迫っている緊急の事態
リスク	・予測できない危険。損害を受ける可能性。（大辞林 第三版） ・事故の回避能力を育む危険性。子どもが判断可能な危険 <sup>6)</sup> 。 ・健康や生命、環境、資産、経済活動において、危険や損失など望ましくない事象を発生する不確定性の程度（確立）ないし損失の大きさの程度 <sup>9)</sup> 。	身体的損傷や経営上の損害の可能性
ハザード	・危険。特に、予測できない危険。（大辞林 第三版） ・事故につながる危険性、あるいは子どもが判断不可能な危険 <sup>6)</sup> 。	危険の程度が高い状態、または危険そのもの
事故	・悪い出来事、思いがけず起こった災難。（大辞林 第三版）	不慮の災難
事件	・争い・犯罪・騒ぎ・事故など、人々の関心をひく出来事、訴訟事件の略。（大辞林 第三版）	不慮ではない事故、または一般に公開された事故
安全管理	・危険をどのように回避し安全に保育を行うための、子どもの視点からみた事故防止対策 <sup>9)</sup> 。 ・環境改善と事故実態の把握から事故予防の意識向上 <sup>22)</sup> 。 ・（安全管理と危機管理）事件や事故、不祥事、災害などに対して、子ども及び職員の生命を守り、日常の保育や園に対する信頼を維持するために、危機を予知・予測し、回避に努めるとともに、危機発生時には、被害を最小限に留めること <sup>8)</sup> 。	子どもが怪我などをしないための保育を視点とした事故予防対策
危機管理	・保育の運営からの視点からみた事故防止対策 <sup>9)</sup> 。 ・（リスクマネジメント）事故を限りなくゼロにし、万が一起きってしまった場合の速やかな対処と再発防止対策 <sup>1)</sup> 。	リスクを最小限に留めるための園運営を視点とした事故時及び事故後対応策
リスクマネジメント	・リスクアセスメント（リスク要因の特定と分析）の結果に基づいて、危険度を一定値以下に抑えるために管理（禁止を含む）する手法。危険度管理。（大辞林 第三版） ・保育園における運営の困難を避けることを目的に、園に関わる様々なリスクを管理し対策を検討すること <sup>9)</sup> 。	特に園運営の視点で考える危機管理の検討方法

（表中の脚注番号は本文中の脚注番号と同掲）

一般的に安全とは、安心な状態、危険は損害・損傷を負う可能性が高い状態、危機は災害などによる非常に危険な状態<sup>4)</sup>を表しているが、小笠原ら<sup>5)</sup>は、保育環境における安全は「危険でないこと」というゼロ・リスクの考え方に基づいており、不可視のリスクへの気づきがないことを指摘している。一方、リスクやハザードについて一般的にリスクは、健康や生命、環境、資産、経済活動において危険や損失など望ましくない事象を発生する不確定性の程度や、損失の大きさの程度を指し、ハザードは予想不可能な危険を指す。しかし「都市公園における遊具の安全確保に関する指針<sup>6)</sup>」では、リスクは子どもの事故の回避能力を育む危険性であり、ハザードは事故につながる危険性、あるいは子どもが判断不可能な危険と定義しており、リスク要因の中には、子どもの成長を育むものもあると捉えている。安全管理、危機管理、またはリスクマネジメントに関して、厚生労働省<sup>7)</sup>は危機管理を「危機管理（リスクマネジメント）」と表記し、牧野<sup>8)</sup>は、安全管理と危機管理を別々に扱わず「安全管理と危機管理」と表記し、事件や事故回避のための施設設備の安全点検などの取り組み、子どもへの安全指導、地域や家庭との連携や協力による安全確保、保育者の危険意識の向上など、事故や事件に対しての予防から対応、再発防止までの一連の対策を表し、マニュアルの重要性を指摘している。一方、田中<sup>9)</sup>は「安全管理は子どもの視点、危機管理は園運営の視点からみた対策」と定義し、リスクマネジメントはリスク要因の特定、分析及び評価と戦略によって事故防止対策を検討することと述べている。

これらの先行研究で扱われる安全や危険に関する用語をまとめると、安全、危険、危機は状況、状態を示すのに対して、リスク、ハザードは予想される損傷、損害の程度を示す。安全管理、危機管理は、事故に関する事前、事後、再発予防対策を示し、リスクマネジメントは安全管理及び危機管理のあり方を示していることが明らかとなった。

以上を踏まえて、本論での保育における安全と危険、それに伴う安全管理及び危機管理を定義する。保育における安全とは、子ども、保育者、保護者などが安心して活動したり、見守ったり、預けることができる状態を示すが不可視のリスクも含む。一方、危険は子どもが怪我などをする不安を感じる状況や状態であり、その状態を回避するための保育者の指導や援助が必要な状態を示す。また、実践上の保育における安全と危険の判断は多様な捉え方が予想されるため、本論では、安全・危険と表記する。安全管理は主に保育を視点とした事故防止対策を示し、危機管理は園の運営を視点とした事故時対応、事故後対応、再発防止対策を示す。実質的に一連の対策として扱われるため、本論では、安全及び危機管理と表記し、特に園の運営に関する危機管理の検討方法をリスクマネジメントとする。

### 3. 近年の保育事故と研究動向

#### (1) 保育事故と社会動向

保育現場での子どもの事故は、厚生労働省「保育施設における事故集計<sup>10)</sup>」にて、認可保育所・無認可保育施設での死亡事故や治療に要する期間が30日以上を負傷や疾病を伴う重篤な事故等（報告のあったもの）が公表されている（表2）。また、独立行政法人日本スポーツ振興センター（以下スポーツ振興センター）では、幼稚園、保育所（児童福祉法第39条に規定する施設）での災害共済給付金等の支払いをもとにした学校管理下の災害報告<sup>11)</sup>により年齢、性別、事故状況、死因・障害種別名が公表されている。

一方、近年社会的に注目された保育中の重篤な事故として、上尾保育所<sup>注2)</sup>、かしの木保育園<sup>注3)</sup>の園児死亡事故がある。

表2 死亡及び負傷等の報告件数  
(平成26年1月1日～平成26年12月31日)

	負傷等	死亡	計
認可	150件	5件	155件
認可外	10件	12件	22件
計	160件	17件	177件

厚生労働省（事故報告概要）より筆者作成

上尾保育所の事件に関して猪熊<sup>12)</sup>、樋口<sup>13)</sup>は、事故の原因は不慮ではなく、保育計画、保護者対応、職員間の連携の問題を指摘している。かしの木保育園の事故では、第三者委員会による検証報告<sup>14)</sup>が行われ、園と行政の事故に関する検討、検証、遺族に対する対応の問題を指摘している。特に、上尾保育所の事件では公務員である保育士にも過失が認められ、保育者の安全及び危機管理に関する専門性と法的責任が注目されるきっかけとなった。

坂田ら<sup>15)</sup>は、幼稚園・保育施設で子どもが損害を受けた事故が訴訟に発展した判例集に基づき量的変化の傾向を考察した。1971年～1980年にかけて急激に保育における訴訟件数は増加しており、特に乳幼児突然死症候群では、原因が不明であることから遺族は疑念を抱くことが多く、訴訟に発展する事例傾向を指摘している。また小澤<sup>16)</sup>は、保育に関する事故の判例から園管理当局と保育者の安全配慮義務の傾向を分析した。園管理当局と保育者の安全配慮義務の関係は、園管理当局の安全配慮義務が適正に履行された場合かつ保育者の安全配慮義務の範囲において、保育者の保育における不注意ないし努力なき専門的水準が不十分の場合、保育者の安全配慮義務違反が問われるべきだと指摘している。

このような保育事故に関する社会的動向の中、内閣府・文部科学省・厚生労働省は、質の高い教育・保育及び地域子ども・子育て支援事業を実施し、全ての子どもが健やかに成長するように支援する「子ども・子育て支援新制度」の施行に先駆け、2014年、事故情報の公表や検証方法について「教育・保育施設等における重大事故の再発防止策に関する検討会<sup>17)</sup>」を開催した。その趣旨は、子ども・子育て支援新制度において事故の発生または再発を防止するための措置及び事故が発生した場合における市町村、家族等に対する連絡等の措置を講ずるものである。

少子化対策により、保育現場への期待は増々大きくなっている。そして、保育の基準が保育制度改革に沿って緩和される動向がある一方で、保育運営と保育者の専門性のあり方は、法的責任や行政による安全及び危機管理体制によってより厳格化されつつある。

## (2) 保育における安全及び危機管理に関する研究動向

保育における安全及び危機管理は、子どもの安全や健やかな成長を保障するだけでなく、保育運営や保育者の専門性の責任が問われる社会動向を受け、そのあり方が注目されてきている。一方で、1997年、保育学研究第35巻にて「園生活と安全教育」のテーマで特集論文が挙げられたが、近藤<sup>18)</sup>は、学会における安全や安全教育に関する発表が極めて少ないことと、事例が少ないため研究として取り上げにくいことを指摘している。そこで、近年の保育現場での安全及び危機管理に関する事例研究を広域に探り整理し、研究の動向と課題を検討する。

### ① 保育における安全及び危機管理のあり方

牧野<sup>19)</sup>は保育現場における安全及び危機管理のあり方を検討し、事例に基づきマニュアルの整備と活用方法を提示した。小笠原ら<sup>20)</sup>はリスクマネジメントでは補いきれない保育現場でのリスクの多面性を指摘し、リスクコミュニケーション（個人、機関、集団間で情報や意見のやり取りの相互作用過程）を取り入れたリスクガバナンスの考え方を提示している。

### ② 事例からみる事故原因

浦添ら<sup>21)</sup>は、スポーツ振興センターのデータをもとに事故の要因を建築的視点からの環境要因と、幼児の行動・能力の問題の人的要因の関わりがあることを指摘した。宮原ら<sup>22)</sup>は、保育環境における安全性を測定する基準として、健康・衛生チェックリストを用いて保育環境のもつ潜在的な危険性を指摘した。また、園内の事故実態調査により、保育環境のもつ潜在的危険や不備な環境条件

の環境要因と、子どもと保育者の人的要因の視点を明らかにし、保育環境の安全性の見直しを指摘している。

### ③保育者の問題意識からみる安全及び危機管理の取り組み

大西ら<sup>23)</sup>は、保育所施設長から「健康及び安全」の取り組み状況を把握し、保育者の安全及び危機管理に関する認識と現状の課題を明らかにした。また、矢藤ら<sup>24)</sup>、村岡ら<sup>25)</sup>はリスクマネジメントの組織的な取り組みに関するマニュアルの活用、専門機関との連携、子どもへの安全教育、心のケア、保育者の教育研修などの実態と問題意識を明らかにしている。山田<sup>26)</sup>は保育者の小児一次救命処置に対するスキルの自信について質問紙調査を行い、認識はあるが自信が持てないという実態を明らかにした。

### ④体験事例からみる保育者の安全及び危機管理意識

石川ら<sup>27)</sup>は、保育者のヒヤリハット体験をもとに危険場面認知の実態を把握し、事故予防の考察を行っている。齋藤ら<sup>28)</sup>は実習生の体験した危険事例をもとに、原因、責任感、安全についての保育観を分析し、経験によって安全管理意識が具体化し高まることを指摘した。

これらの研究をまとめると、保育における安全及び危機管理に関する先行研究では、事例検討から保育者の安全及び危機管理に関する具体的な取り組みを把握し、保育に関するリスクを減らすためにどのように予防し対応すべきか、というリスクマネジメントの考え方による研究動向がうかがえる。一方で保育の内容を視点とした安全・危険に対する保育者の意識に着目した研究はない。保育現場において子どもの安全を保障するためには、リスク回避のための物的・人的環境を整えるリスクマネジメントと共に、保育を担う保育者に着目し、子どもの安全・危険を保育者の専門性の視点から明らかにすることは、保育における安全及び危機管理において意義のあることと考える。

## 4. 安全及び危機管理における保育者の専門性

### (1) 保育者の専門性の特徴

保育の質には、大きく分けて施設設備などの物的環境・労働条件・人間関係と、保育者の人間性や専門知識・技術である保育者の専門性がある<sup>29)</sup>。保育指針<sup>30)</sup>には保育者の資質について、職員一人一人の倫理観、人間性、職員間の協働性、自己研鑽などが挙げられている。しかし、それらは物的環境などと比べて不可視で評価しにくいものである。安全及び危機管理における専門性を検討しようとする本研究では、主としてこの人的な部分に特化して検討を進めたいと考えている。そこで、以下では、人的環境としての保育者の専門性に関する研究を俯瞰し、安全及び危機管理における保育者の専門性を検討するために必要な視点を整理する。

#### ①「質」尺度を用いた保育の質の検討

岩立ら<sup>31)</sup>は3歳未満児を対象にした保育の質を測定するための尺度案を作成し、「保育者の関係」「保育者の保育姿勢」「保育のあり方」「子どもの姿」「親との関係」「保育環境・条件」の6領域を設定した。西山<sup>32)</sup>は、保育者の心的充実や成長、保育質向上につながる保育者効力感に着目をして保育内容「人間関係」における多次元保育者効力感尺度を作成し、尺度を用いて自らの保育を省察することを提示している。

#### ②保育者の成長過程にみる保育の専門性

高濱<sup>33)</sup>は保育を問題解決という視点で捉え、問題意識や解決方法など問題解決への一連のプロセスに保育経験による違いがあることを明らかにした。足立ら<sup>34)</sup>は、保育者の成長は様々な問題を体験していく中で保育者としてのアイデンティティを再構築し、自己を確立していく過程として

捉え、経験年数によって問題に関する揺らぎがあることを明らかにした。

### ③実践からみる保育者の専門性

永瀬ら<sup>35)</sup>は、集団保育の片づけ場面における子どもたちの様々な状況に対し、保育者がどのような対応をしているのかを検討した。その結果、保育者は子どもの年齢や遊びの状態などを見極め、片づけ行動を引き起こし、維持するために様々な対応をすることを明らかにした。草信ら<sup>36)</sup>は、子どもと保育者の相互作用としての保育者の身体知に着目して分析をした。その結果、子どもの表現を感知し、意味を知りそれにふさわしい応答をする「知性に裏付けされた感受性」という保育者の専門性を明らかにした。

### ④職階にみる保育者の専門性

吾田<sup>37)</sup>は保育者の専門職者としての成長過程における課題や危機的状況への認識に着目をして、新任・中堅・主任保育者それぞれの課題の認識を明らかにした。太田<sup>38)</sup>は地域子育て支援での保育者の取り組みにおける、保育者を支える組織的環境と相互関係を検討した。その結果、保育者を支える重層的組織環境、保育者間で思いや価値観を自由に表現でき共有できる人的環境、人事的マネジメントが保育者を支え、保育専門集団としての保育者の発達を支えていると指摘している。

以上の研究から保育者の専門性とは、子どもの活動に対して保育者がその意味をどのように認識し、関わるかという保育者の保育に向かう態度と日々の保育を実践するためのスキルに焦点が当てられることが多く、そして、それらを経験年数や職階での変容に着目して、その差異から構造的に捉えようとする動向が見られた。また、保育者の専門性を探る方法としては、尺度による客観的評価、保育内容の実践からみた質的な検討があった。それぞれの研究からは、保育における安全及び危機管理における保育者の専門性を明らかにしようとする本研究の今後への示唆に富む知見が得られた。

## 5. 今後の研究の方向

本論では、保育における安全及び危機管理に関する先行研究を基に、安全・危険に関する用語を定義した。次いで、保育における安全・危険に関する研究傾向を整理し、保育者の専門性に着目した保育現場での安全・危険意識の研究の意義を論じた。

保育における安全及び危機管理における保育者の専門性を明らかにしようとする本研究の今後においては、重大事故の予防という観点を基軸とし、以下の2つの方向から研究を進める。重大事故は決して日常的なことではなく稀な状況ではあるが、より大きな問題を基軸に据えることで、安全及び危機管理という課題の典型性が高まると考えたためである。

1つ目は、日常の保育の中で保育者はどう子どもの安全・危険を意識しているのか、どのような手立てで関わっているのか、さらにはどのような問題意識をもっているのかなどについての保育者の保育に向かう態度を調査する。その際に経験年数や職階に着目する。それによって重大事故に繋がる潜在的な問題を掘り起こす。

2つ目は、事故に遭遇した経験を振り返り、なぜその事故は起こったのか、その際の保育者の対応の問題点は何かを検証する。個々の事例から共通点を集約する。

### 注

(注1) 2001年大阪府池田市の大阪教育大学附属池田小学校で発生した、校内への侵入者による小学生無差別殺傷事件。

(注2) 2005年8月、上尾市が運営する上尾保育所にて4歳児クラスの園児が所内の本棚の下の収納庫の中で熱中症となり死亡する。その後、両親により損害賠償訴訟が提起され、上尾市、上尾保育所長及び担任保育士2人に対して業務上過

- 失致死罪による罰金刑が命じられた事件。さいたま地裁平成21年12月16日判決（平成19（ワ）537号）
- (注3) 2011年10月、碧南市私立かしの木保育園にて、当時1歳4か月の園児が、昼寝から起きておやつのおべーカステラを食べているところ窒息状態となり、意識不明のまま後日死亡。両親の要求によって2012年5月第三者委員会が発足し、2013年2月検証報告書が市長に提出された。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省「福祉サービスにおける危機管理（リスクマネジメント）に関する取り組み指針」  
入手先<<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/04/h0422-2.html>>（参照2015.3.20）
- 2) 小山健蔵・白石龍生・山根祥雄・安井義和（2005）「学校における安全管理と危機意識の状況について」大阪教育大学紀要 第IV部門 54（1） 99-109
- 3) 長谷川万由美・森田香緒里・長香織・永井知子・糸賀みちる（2013）「保育所におけるリスクマネジメントー東日本大震災の宇都宮市保育所の対応を中心にー」宇都宮大学教育学研究紀要（63）1 1-12
- 4) 愛知県（2006）「愛知県危機管理推進要綱」  
入手先<<http://www.pref.aichi.jp/bousai/kikikanri/toppage.html>>（参照2015.3.20）
- 5) 小笠原文孝・根上優・崎村秀樹・玉村敏郎・安留隆（2010）「保育環境の整備とリスク・ガバナンスに関する研究」保育科学研究 1 126-136
- 6) 国土交通省（2014）「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」  
入手先<[http://www.mlit.go.jp/crd/park/shisaku/ko\\_shisaku/kobetsu/yougu.html](http://www.mlit.go.jp/crd/park/shisaku/ko_shisaku/kobetsu/yougu.html)>  
（参照2015.3.20）
- 7) 前掲1)
- 8) 牧野圭一（2013）「保育現場における安全管理と危機管理のあり方」筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要 8 189-201
- 9) 田中哲郎（2011）「保育園における事故防止と安全管理」日本小児医事出版社 1-12
- 10) 厚生労働省「保育施設における事故報告集計」入手先  
<<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000036122.html>>（参照2015.3.20）
- 11) 学独立行政法人日本スポーツ振興センター「学校事故事例検索データベース」  
入手先<[http://www.jpnsport.go.jp/anken/anken\\_school/anken\\_school/tabid/822/Default.aspx](http://www.jpnsport.go.jp/anken/anken_school/anken_school/tabid/822/Default.aspx)>  
（参照2015.3.20）
- 12) 猪熊弘子（2011）「死を招いた保育ルポルタージュ上尾保育所事件の真相」ひとなる書房 178-193
- 13) 樋口晴彦（2012）「上尾保育所児童死亡事故の事例研究」政策情報学会誌 6（1） 105-112
- 14) かしの木保育園園児死亡事故第三者委員会（2013）「碧南市「保育事故」第三者委員会報告」月刊『保育情報』（438）5 28-47
- 15) 坂田仰・山田知代（2011）「幼稚園・保育施設における子どもの事故に関する裁判例の動向ー「量的」変化に着目してー」樹下道：家政学専攻研究 3 2-13
- 16) 小澤文雄（2011）「保育活動にともなう事故と保育者の安全配慮義務ー保育活動にともなう事故の判例分析・検討を中心としてー」東海学園大学研究紀要 人文科学研究編 16 83-104
- 17) 内閣府 子ども・子育て会議「教育・保育施設等における重大事故の再発防止策に関する検討会」  
入手先<<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/meeting/index.html>>（参照2014-11-20）
- 18) 近藤充夫（1997）「園生活と安全教育（総論）」保育学研究35（2） 8-11
- 19) 前掲 8)
- 20) 前掲 5)
- 21) 浦添綾子・仙田満・矢田努（1997）「幼児の活動空間における安全性について」保育学研究 35（2） 12-19,
- 22) 宮原和子・小方信二・鹹味千寿子・宮原英種（1997）「保育環境の安全性に関する研究ー安全、健康・衛生チェックリストの作成と園内事故の調査ー」保育学研究 35（2） 20-27
- 23) 大西昭子・矢野智恵・片岡亜沙美・森澤徹男・小島一久・山崎美恵恵子（2013）「保育士が捉えた「健康及び安全」への取り組み状況と課題に関する検討ー保育所施設長に焦点をあててー」高知学園短期大学紀要 43 17-30
- 24) 矢藤誠慈郎・森俊之・青井夕貴・石川昭義・西村重稀（2012）保育科学研究 3 1-15
- 25) 村岡眞澄・鈴木文代・松岡宏・横井一之・渡辺桜（2013）「保育園での保健・安全に関する環境及び指導の実態と今後の課題ー

## 保育における子どもの安全・危険に関する研究動向

- 愛知県における実態調査をふまえてー」保育士養成研究 31 135-144
- 26) 山田恵子 (2012) 「乳幼児の小児一次救命処置に対する保育士の認識と現状」日本小児看護学会誌 21 56-62
  - 27) 石川昭義・大木野裕明・伊東知之 (2009) 「保育士のヒヤリハット体験」仁愛大学人間生活学部篇 創刊号 39-52
  - 28) 齋藤信・中野隆司 (2013) 「保育所実習における危険事例と安全管理意識 (1)」山梨学院短期大学研究紀要 33 62-72
  - 29) 秋田喜代美・箕輪潤子・高櫻綾子 (2007) 「保育の質研究の展望と課題」東京大学大学院教育学研究科紀要 47 289-305
  - 30) 厚生労働省 (2008) 「保育所保育指針解説書」厚生労働省編 フレーベル 199-213
  - 31) 岩立志津夫・諏訪きぬ・土方弘子・金田利子・木下孝司・齋藤政子 (1997) 「保育者の評価に基づく保育の質尺度」保育学研究 35 (2) 52-59
  - 32) 西山修 (2006) 「幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成」保育学研究 44 (2) 150-160
  - 33) 高濱裕子 (2001) 「保育者としての成長プロセスー幼児との関係を視点とした長期的・短期的発達ー」風間書房 35-85
  - 34) 足立里美・柴崎正行 (2010) 保育者のアイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討ー担任保育者に焦点をあててー」保育学研究48 (2) 107-118
  - 35) 永瀬裕美子・倉持清美 (2013) 「集団保育の片づけ場面における保育者の対応」保育学研究51 (2) 87-96
  - 36) 草信和世・諏訪きぬ (2009) 「現代における保育者の専門性に関する一考察ー子どもと響き合う保育者の身体知を求めてー」保育学研究47 (2) 82-91
  - 37) 吾田富士子 (2014) 「保育者の成長と現職教育の組織化ー主任保育士の意識と他職種の専門性からー」藤女子大学人間生活学部紀要 51 49-56
  - 38) 太田光洋 (2008) 「専門家として保育集団の発達を支えるものー地域子育て支援活動の取り組みにみる保育者の相互支援ー」保育学研究 46 (2) 43-52